

部屋中に使用済みのコンドームが散乱している。

「はあっはあんっ んぶっれるっ ちゅぶっ あはんっ！」

朝日が部屋に差し込む中、がに股で情けない姿になりながら、顔を惚けさせて尚美は、愛する生徒との肉欲に溺れていた。

「ああああんっ！はあああんっ いつ いいっ！いいのっ
んちゅっ…んんっ！べろっ べろっんんっ」

昭弥は、まだまだ新鮮なセックスの感動に、興奮は増すばかりだ。

「先生っ…んんっ！はあっはあっ」

「あああああっ！いくっ…！またいくっ…！ああああああっ！」

「んんっ…！」

「!?!」

なんと、先生は僕にキスを…！
もちろん僕は、ファーストキスだ。
驚きと唇の暖かい感触で、
みるみる勃起してしまう。

ちゅっ…

びくっ…!

(なんて柔らかくて温かい…
これがキス…！しかも！
憧れていた村内先生と…っ！！)

心臓のバクバクと、興奮が止まらない。

(あああ…かわいい…この無垢な反応…
やっぱりこの子でよかった…。
もっとこの子とエロい事したい…
舌入れたい…！)

「ああああっ！あああ…！先生…!!!先生っ！」

陰唇が開かれ、尿道、膣口が露わになったとき、昭弥は再び射精した。

「すごおい…先生のおまんこ見ただけでこんな何回も射精してくれるなんて…。」

「ああっ！ああああ！先生…先生！」

精液は激しく飛び散り、なかなか収まらない。

「はあっ…もっと…もっと気持ちよくなって…。」

(あああ…穴が…！穴がある…肉が詰まってる…あそこにおちんちんを入れるんだ…！僕のおちんちんも…！)

「はううんっ！」

舌を入れられるものだと
思っていた尚美は、貝を舐められて
不意打ちで興奮してしまう。

づんっ…♡♡

びく

びくっ♡

ちよあ♡♡

(ああ…先生の…愛液…熱くて…しょっぱくて…
先生の味…村内先生の…味…！)

射精後の残り汁が龟头からビクビクと溢れている。

「ああ…いいわ…やさしく舐めて…！」
(もっと…もっと…舐めたい…)

どくっ…♡

はあんっ♡♡

交尾体勢に入った時点で、オスの本能が、腰を突き動かしてしまった。

「こらあ あせっちゃだめ…」

はぁ♡
はぁ♡
はぁ♡

ビキビキ…

♡

ビク
ビク!

ちゅる、
ビク、
ビク!

ブル
ブル

ちゅる!

ちゅる♡

「はぁあ…先生…でも…気持ちよくて…！」

ぬちゅぬちゅと、愛液が竿に絡み、泡を立てている。

「腰は中に入れたらいろんな方向に動かしていいのよお…
私も動くけど…先生の気持ちいいところを
探して突いてくれると嬉しいな」

尚美の声もあまり届かず、昭弥は腰を振りまくっていた。

「あぁあ…先生…出るっ…！出る…！」

ちゅあ
ちゅあ

ぬちゅ

ぬちゅ♡

く
く

はは
はは…!



はっ♡ はっ♡

「そよよ…もう少し下…」
「は…あ…先生…入れますよ…」
入れますよお…っ!!」

ひくひく♡

はあ♡
はあ♡

びく♡

びく!!
びくびく

びくびく♡

はあ…!
はあ…!!
はあ

「来て…入れて…私の中に！」

絶対にありえないと思っていた、村内先生とのセックス!

「はあ…はあ…先生！」

そして、いよいよ亀頭の先が、入り口の膣肉を押しわけて…。

ドキドキ

バグバグ

びくびく♡

びくびく…!!

尚美も、何度射精しても萎えない、
大人の体になって間もないオスの肉棒による
途切れないピストンに、何度も絶頂していた。

はっ♡
はっ♡
はっ♡
はっ♡

はっ…
はっ…

びるん

びるん!

びちゃっ!

びちゃっ!

「あひいいっ…! いくっ…いってるっ…!」
「先生…先生…! キスしたい…村内先生とキス…!」

こんなにまで、自分を求めてくれる男性とのセックスは、
遠い彼方までさかのぼらないと記憶がなかった。

「私も若里君とキスしたい…」
「先生…好きです…先生…」

金曜日。

今日は首筋や顔まで舐めまわされ、おっぱいも執拗に愛撫され、そしてショーツにはいよいよ直に手を入れられた。

「はあ…はあ…。この茂みと…熱い肉壺…たまらんわ…」

「はあ…いけません矢那本先生…っ！だめ…」

「愛液止まらないのか…」

くちゆくちゅ、じゅぽじゅぽと指で膣内をかき回す。
嫌だ。いやで仕方ないのに、この人は愛撫がうまい。

意思とは無関係に、感じてしまう。

「ああっ だめっ いっちゃうっ！ああああっ！あっ！

「今日は何度でもいかせてあげますよ 村内先生」

むさぼってもむさぼりきれない、
2人はお互いを激しく求め合った。
キスしながら、ひたすら性交にいそしむ。

にゅわんっ！

にゅわんっ！

にゅわんっ！

もみ...

あっ♡

あっ♡

はっ♡

あっ♡

はっ♡

「先生…もっと…もっと…！先生をもっと…」
「昭弥くんっ…ああっ…！私をもっと欲しい…！」

アパートだが、外に声が漏れようとも気にしなかった。
ただ、お互いが、欲しい。欲しくてたまらない。

「な…尚美…先生…っ…！」

「ああっ…うれしいっ…！あああ…！」

あっ♡